

をくり(小栗判官絵巻)

伝岩佐又兵衛 十五巻のうち 紙本着色 江戸時代(十七世紀)



表紙の題せんに「をくり」と記される本絵巻の物語

は、中世に常陸国小栗御厨を治めていた小栗氏にまつわる伝説を源とし、その伝説は縁ある時宗総本山遊行寺の聖らが念仏を唱えて教義を説き歩く中で語られたものであった。その語りは、より人々の関心と理解を促すために音曲と結びつき、また主人公の小栗判官と照手姫の恋愛物語を中心として加飾されて親しみ易くされ、説教節の一つとして広く流布することとなった。そして江戸時代には、人形操にも取り上げられて人気の演目ともなり、さらに歌舞伎へと発展した。語り口調で展開することが大きな特徴である本絵巻の詞書は、十七世紀前半に浄瑠璃操と共に隆盛した説教節の正本を用いていると考えられ、説教節『小栗判官』を伝えるものとしては、その内容を完備する最も古い形態を示していると考えられる。

絵巻の現状は全十五巻。一紙の寸法は、概ね、縦三三・八〇センチ×幅九四・〇〇センチ。巻第一〜四は十三紙が継がれて約一一・五メートル、巻第五〜十五はその倍の二十六紙が継がれて約二十五メートル、総紙数は三百三十八紙、総長は約三百二十四メートルに及ぶ。説教節『小栗判官』の正本(テキスト)に基づいて絵画化された段数(場面数)は全三百十二段、詞書の行数はのべ三千二百八十五行である。このうち、巻第五以降の十一巻分については、第十三紙と第十四紙の継目で本来は別巻になっていたことが分かっており、当初は各巻が十三紙、約十二・五メートルにそろえられた全二十六巻からなる

絵巻であった。絵巻の内容は、主人公小栗と照手姫(照手)が数奇な運命のもと苦難を乗り越えて幸せをつかみ、最後は神仏となって祀られることを説いて終わる物語で、仏教的な教えが多々含まれる。各巻の概略は次の様に展開する。

〔巻第一〕京の公卿・二条兼家は、跡継ぎに恵まれなかつたことから、御台を鞍馬寺に参詣させる。そこで毘沙門天より子を授かるとの夢告を受け、十か月後、無事に男児が誕生した。男児は有若と名付けられて大切に育てられた。

〔巻第二〕有若は学問の修得に優れ、十八歳となる。兼家は有若を石清水八幡宮で元服させ、名を小栗と改めて常陸国を知行とした。母は小栗に御台を迎えようとするが、小栗は何かにつけて気に入らず、三年間に七十二人もの御台を迎えては返してしまつた。小栗は定まる妻を娶りたいと祈願のため、鞍馬寺に参詣するが、その途中、深泥池の畔で横笛を吹く小栗の姿を、池の大蛇に見初められる。

〔巻第三〕美しい若い姫に変化して現れた大蛇に惑わされた小栗は、大蛇を館に連れ帰り、契りを交わしてしまふ。その噂が京中に広まったため、兼家は小栗を知行地の常陸へ遠ざけた。常陸では、地侍たちが毘沙門天の申し子である高貴なお方と小栗を敬つて判官とし、仕える。ある日、後藤左衛門という商人が小栗の館を訪ね来て、諸国を幾度も巡り歩いたと話すので、小栗の家来が小栗の妻に相応しい姫がどこかにいないかと尋ねる。

〔巻第四〕そこで左衛門は、武蔵・相模の両国を支配する横山という郡代の一人娘で、日光山参詣の申し子である美しい照手の話をする。小栗は照手への恋文をしたためて左衛門に託す。左衛門はこの恋文を照手のもとに届けた。

〔巻第五〕難解な恋文にためらつていた照手であったが、返書をしたためて左衛門に託す。その返書を受けとつた小栗は、照手の了承を得たと喜び、横山の許し無く婿入りを決め、選りすぐつた家来を連れて照手のもとへ向かい、二人は結ばれる。

〔巻第六〕このことを知つて怒つた横山は、三男の三郎の企てのまま小栗を酒宴に招いて人を食い殺す荒馬・鬼鹿毛に乗馬することを勧め、そのまま犠牲とすることとした。しかし、小栗は鬼鹿毛のつらい状況を察して、その死後は馬頭観音として祀ることを約束し、鬼鹿毛を従わせる。

〔巻第七〕鬼鹿毛に乗馬した小栗は、梯子を登つて主殿の屋根を駆けたり、松の木に乗り上げたり、碁盤に乗るなど、曲芸的な技を披露して、鬼鹿毛を乗りこなす様子を横山一同に見せつける。横山と家来はさらなる企てを相談をして、蓬萊山の宴を催して、小栗を毒殺する計画をたてた。

〔巻第八〕横山の招待を幾度も断つた小栗であったが、七度目にとうとう承知する。照手は不吉な夢を見たので出かけないで欲しいと願うが、小栗は夢違の呪文を唱えて出かける。用心を重ねて飲酒を断り続ける小栗であったが、とうとう、毒酒を飲まされ、二十一

歳で絶命する。横山は占いによつて小栗を土葬し、家来は火葬にした。そして、娘の照手も相模川に沈めようとする。

〔巻第九〕横山の命を受けた鬼王と鬼次の兄弟は、牢輿に乗せられた照手を沈める決断が出来ず、相模川に流す。牢輿の中で観音経を唱えていた照手は観音の慈悲でゆきとせが浦に漂着し、漁夫の長に助けられる。しかし、その美しさに嫉妬した長の妻は、照手を商人に売つてしまふ。照手は売られ売られて能登半島にまで行き着く。

〔巻第十〕照手はさらに金沢から敦賀、大津と売られ行き、美濃国青墓の宿、万屋の君の長のもとへ売られ着いた。君の長は照手に常陸小萩と名付けて遊女の務めを命ずるが、照手はそれを断り水仕事を選ぶ。休む暇なくこき使われる照手は常に千手観音の加護を受け、三年の月日が経つ。一方の小栗は、閻魔大王の前に引き出されて裁かれる。

〔巻第十一〕小栗は娑婆に戻されることになった。閻魔大王は、「この者を藤沢の上人に渡すので、熊野本宮の湯の峯に入れてやればもとの姿に戻れるだろう」と胸札に書き記し、杖で虚空を打つた。築かれてから三年が経つ小栗塚が割れ、餓鬼姿の小栗がそこから這い出て来た。その小栗を見つけた藤沢の上人は、横山一門に知れることを懸念して、小栗の髪を剃り、餓鬼阿弥と名付けた。そして閻魔大王自筆の胸札を読み、「この者を一引きすれば千僧供養、二引きすれば万僧供養」と胸札に書き添え、作った土車に餓鬼阿弥を乗せ、熊野を目指し上人自ら手綱を引いて出発した。相模原では、横山家中の侍たちが照手の供養にとこの土車を引く。餓鬼阿弥は東海道沿いに諸国を引かれ続け行く。

〔巻第十二〕餓鬼阿弥の土車は静岡からさらに西へと引かれ続け、美濃国青墓の宿で照手と出会う。照手

は亡き夫の供養のためと、五日間の暇をもらい、狂女の姿に擬して土車を引き、彦根まで行く。

〔巻第十三〕照手はさらに餓鬼阿弥を引き行き、大津に着く。関寺の門前で「本復されたら、美濃国青墓宿の君の長の館に、常陸小萩という者をお尋ね下さい」と胸札に書き添え、餓鬼阿弥と別れる。餓鬼阿弥はさらに京から天王寺、住吉を経て紀州国内を大峯山まで引かれた。そして大峯山では、山伏に背負われて山を登り、四百四十四日目に熊野本宮の湯の峯に入った。効能豊かな湯に入つて、七日目には両眼が開き、十四日目には耳が聞こえ、二十一日目には口がきけるようになり、四十九日目に元の小栗の姿に戻つた。小栗は熊野三山で修業に入るが、山人に化身した熊野権現より運を開くという金剛杖を受ける。その杖を持つて、小栗は京へ向かつた。

〔巻第十四〕京で両親との再会を果たした小栗は、帝より美濃国を与えられた。そして美濃国に赴き、照手と感動の再会を果たす。

〔巻第十五〕照手に対する君の長の扱いを知つて激怒する小栗を、照手は取りなし、むしろ褒美を所望したので、小栗は君の長に美濃国の領地を与える。照手と共に常陸国に戻つた小栗は横山を攻めると告げるが、照手の父への逆罪の嘆きに免じて横山を許す。横山は子に勝る宝はないことを思い知り、黄金を鬼鹿毛に積んで小栗のもとへ送つた。鬼鹿毛は馬頭観音として祀られる。小栗は大きな屋敷を構えて二代にわたつて富み栄え、八十三歳で大往生した。没後は、美濃国安八郡墨俣、垂井の八幡社に祀られた。また照手はその近くに、縁結びの神として祀られている。

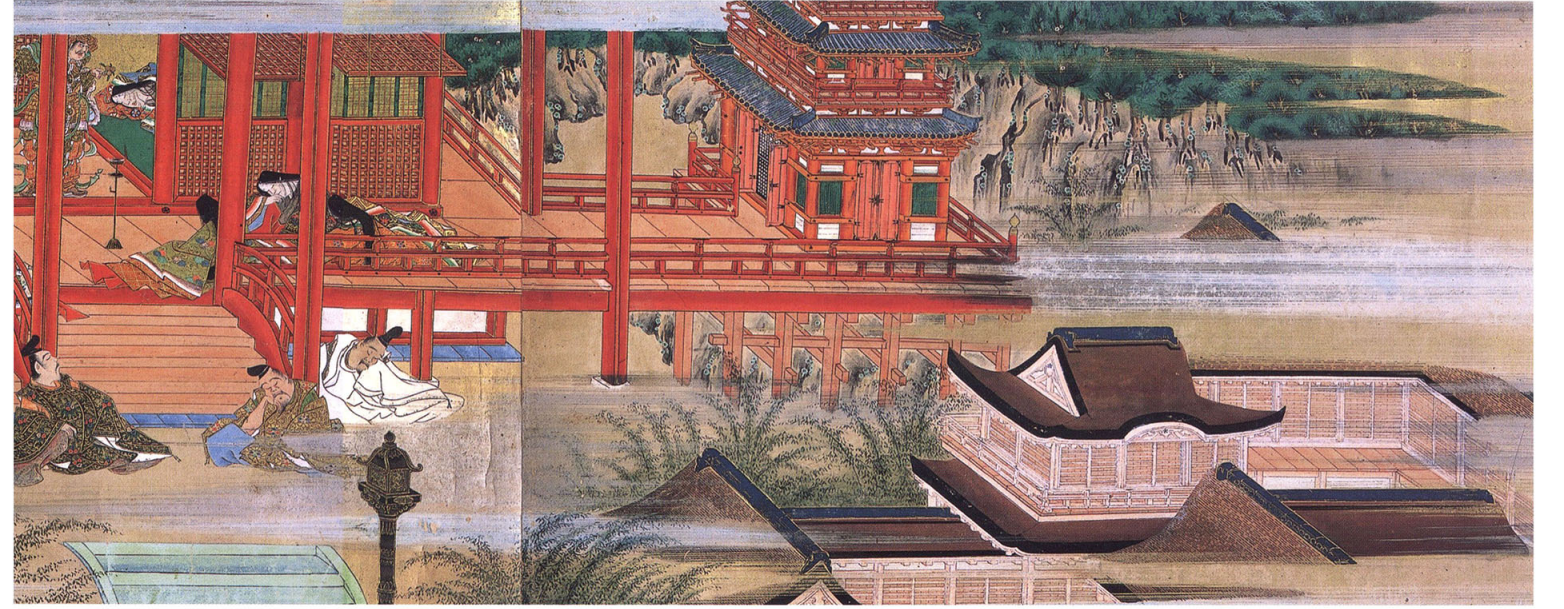
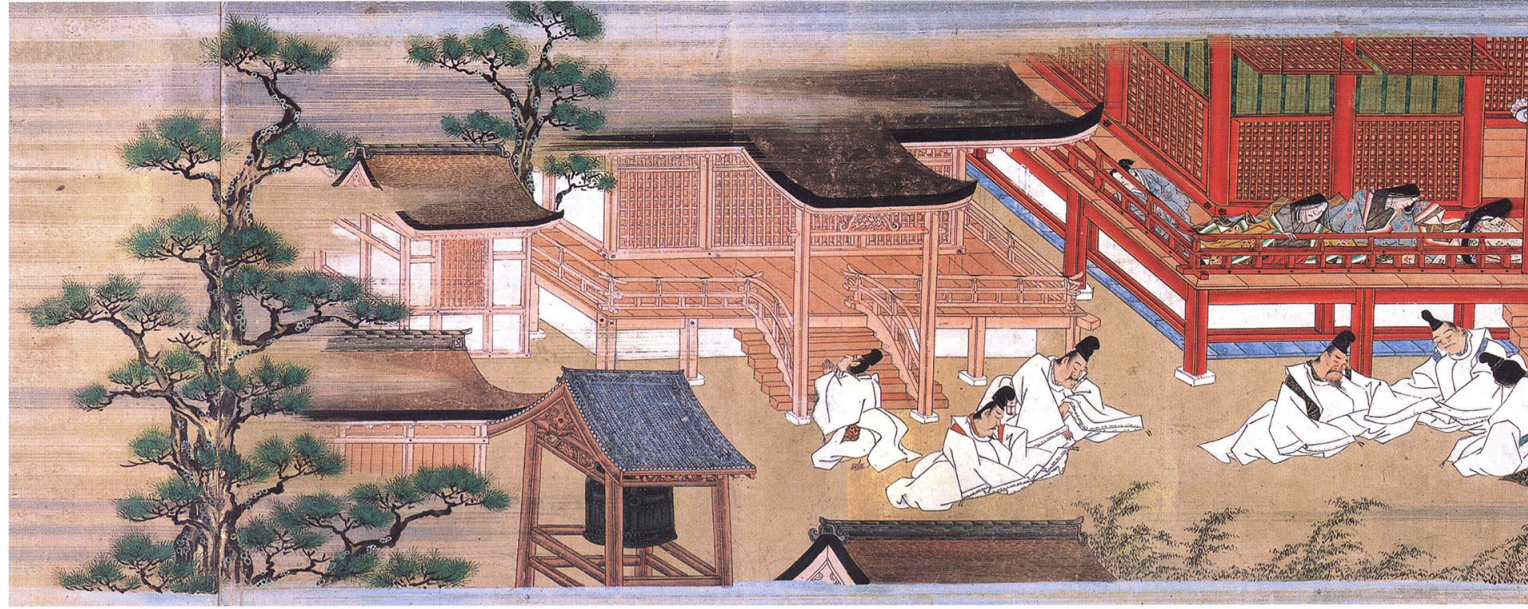
この絵巻制作を担当したのは、十七世紀前半に、京、福井、そして江戸で活躍した岩佐又兵衛(一五七八～一六五〇)と伝えられる。絵巻に落款印章を伴わないが、豊頬長頤の顔貌、手や足先が反り、衣の裾先が翻

るなどの特徴は、いわゆる「又兵衛風」と呼ばれる画風を示しており、岩佐又兵衛とその工房で制作されたものと考えて良からう。

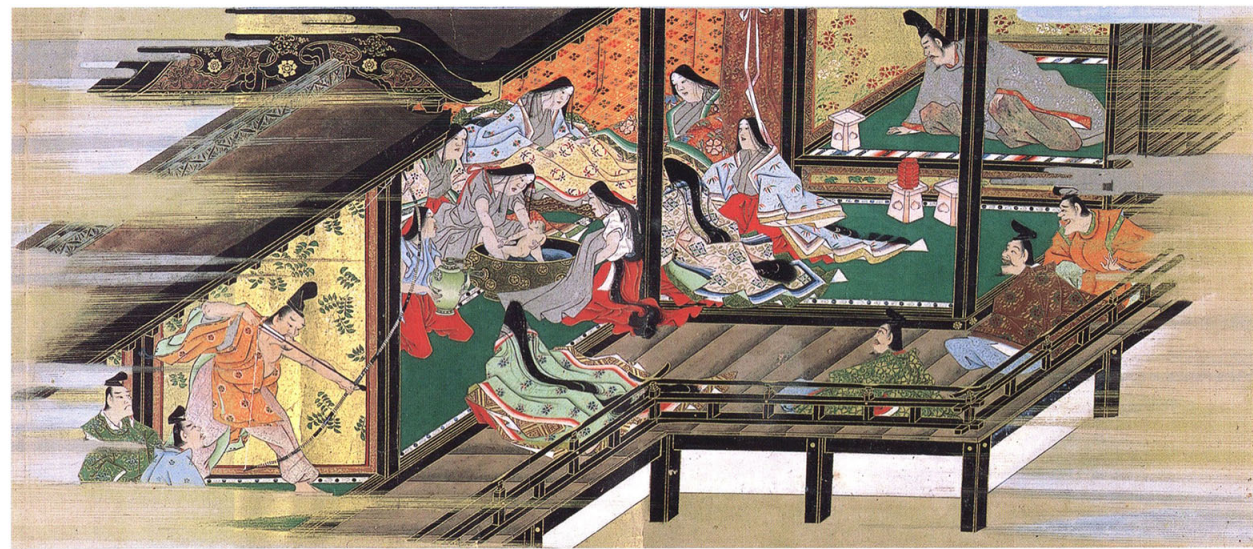
絵巻の場面は、ストーリーが細かく展開し、アニメーションを見るかのようなところもある。「又兵衛風」の特徴的な画風が絵巻全体に表れ、その展開は躍動感に溢れる。しかし、描線が細く柔軟で伸びやかに描かれている場面もあれば、たどたどしい筆線でこじんまりとまとまったような印象を受ける場面もあり、画風は一様でない。こうした描写表現の様子は、他の古淨瑠璃絵巻群―又兵衛工房が関わつて制作されたと考えられる華麗で長大な絵巻。「山中常盤」(MOA美術館)、「堀江物語」(残欠本)、「香雪美術館ほか分蔵」などがある―と同様で、全体には又兵衛風の画風の特徴を備えながら画風には複数の個性が認められてばらつきがあることは、複数の絵師の存在を明らかに示し、大規模な工房における制作であることをうかがわせる。

また、詞書部分は金銀泥によつて様々な植物や鳥、海浜や吉祥をテーマとした装飾画が描かれ、金銀泥による繊細な雲霞を加えて、絵部分を主体に引かれる白群のすやり霞と共に、装飾性と叙情性を高めている。さらに、表紙として飾り付けられた裂は、地を縹色の繻子地とし、萌黄、白、紅、紫、茶の緯糸を浮かして亀甲花菱文に向鶴丸文を表した。また見返しと軸巻紙には、紗綾形文の金箔型押し装飾紙が用いられている。さらに表紙裂左端上部に貼り付けられる題せんには、截金で三重襷の文様が表されており、こうした絵巻全体の華麗な装飾は、絵巻が大名等の高位の人の求めに応じて制作されたであろうことを示している。

本絵巻は、明治二十八年(一八九五)一月、日清戦争の折に広島大本営に前年より逗留されていた明治天皇に、岡山藩家老を務めた片桐池田家第十一代当主・池田長準が御前で披露し、後に献上した作品である。



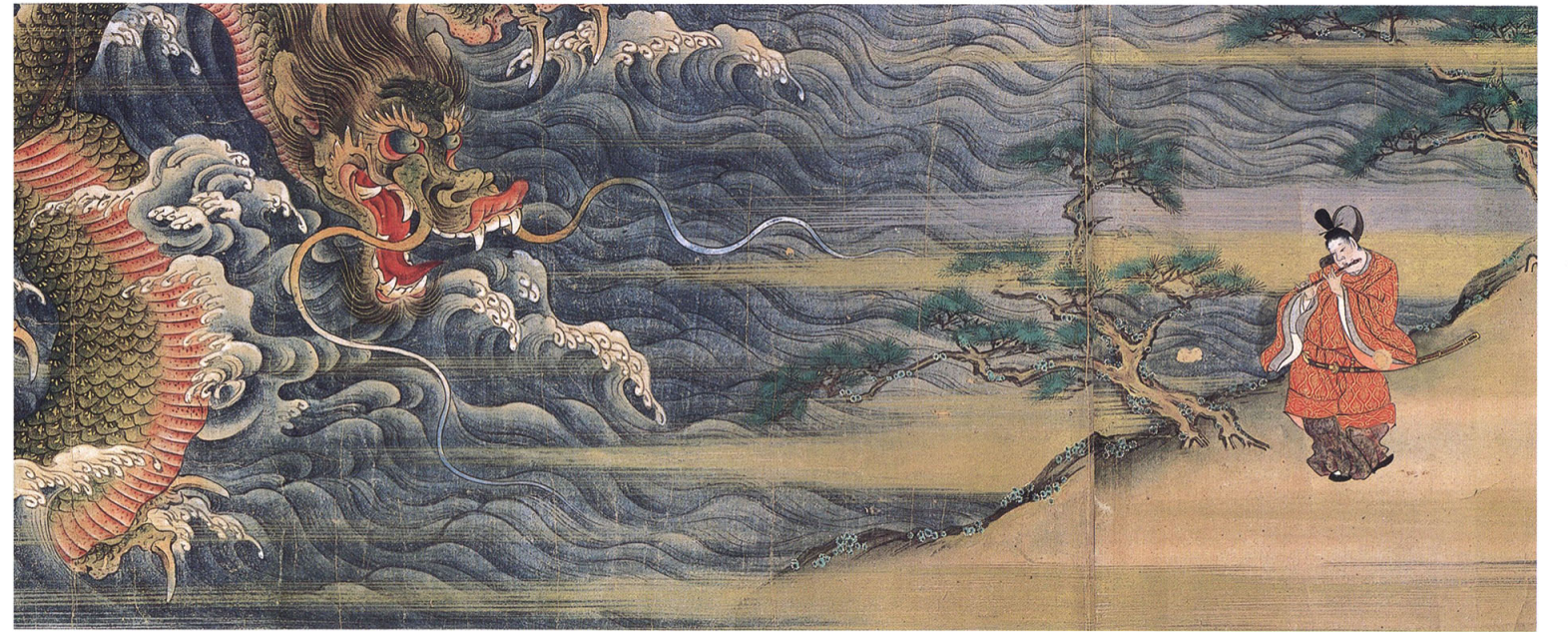
二条兼家の妻は鞍馬寺に参詣し、毘沙門天の夢告を得る 第1巻 第3段



若君に産湯をとらせて鳴弦をする 第1巻 第6段



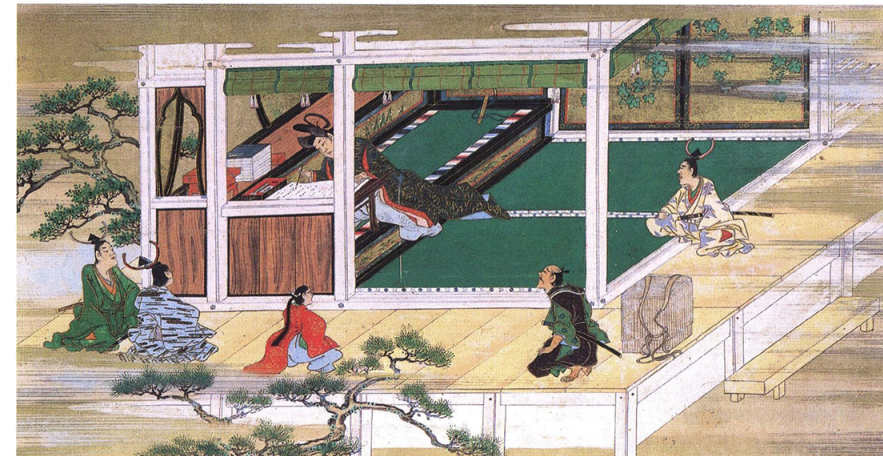
若君の誕生 第1巻 第5段



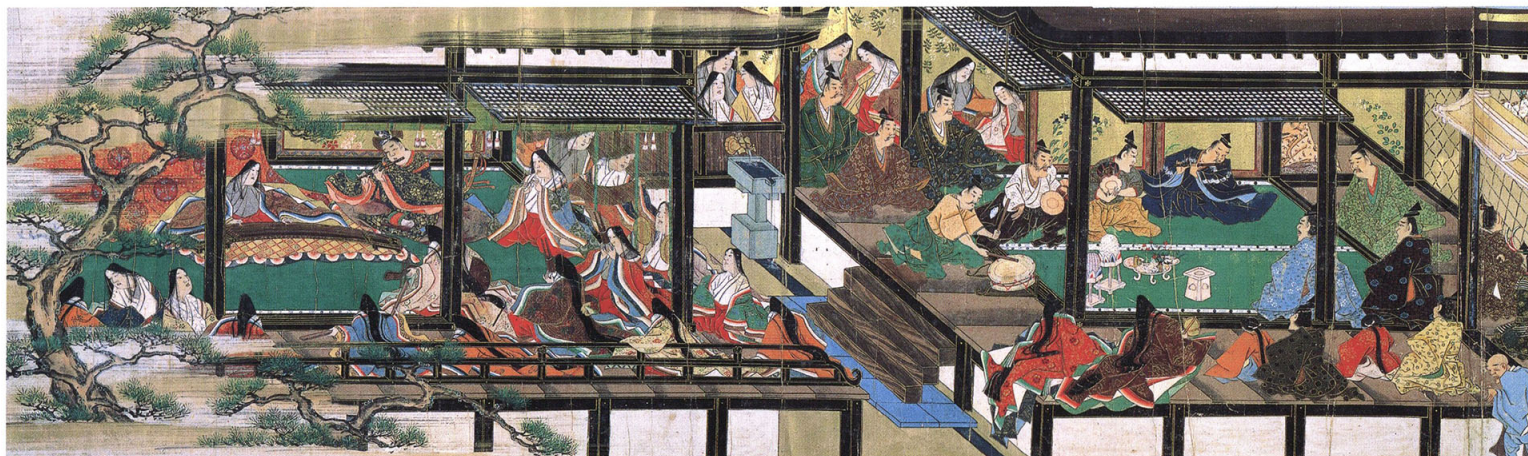
深泥池の大蛇が小栗を見初める 第2巻 第9段



照手は文を読み、自分宛の恋文と知る 第5巻 第2段



小栗は照手へ恋文を書く 第4巻 第3段

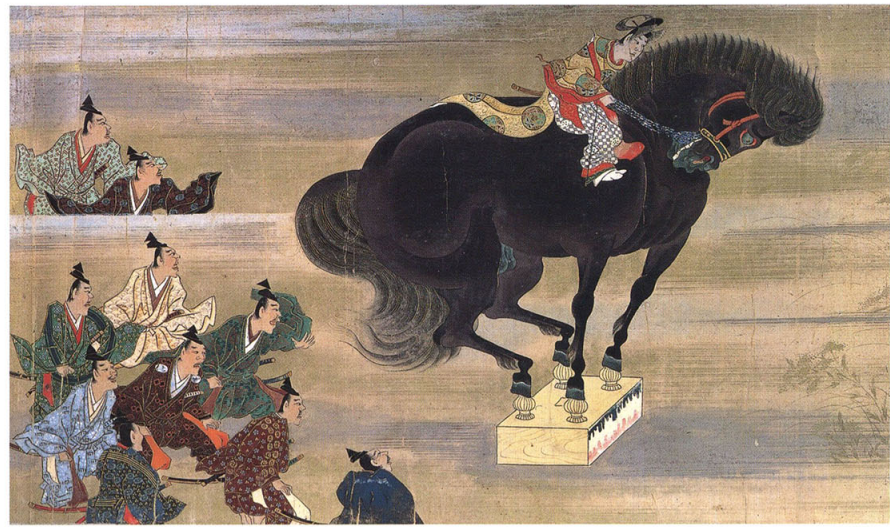


小栗は横山に許しなく婿入りし、照手と結ばれる 第5巻 第18段



小栗が荒馬の鬼鹿毛を乗りこなす様子を見て、横山の家来たちは驚く 第7巻 第3段

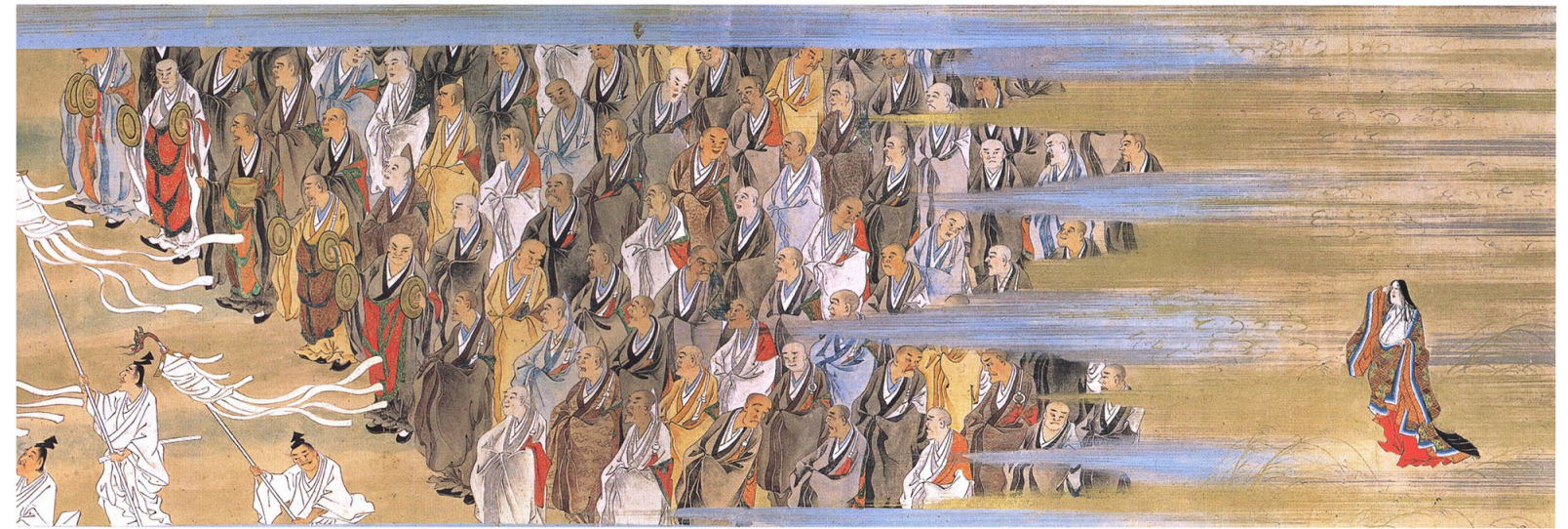




小栗は鬼鹿毛を基盤の足の上に乗せる 第7巻 第9段



小栗は鬼鹿毛を松の木に乗り上げる 第7巻 第7段



横山の酒宴に招かれた小栗に、照手は小栗一行が死装束で北に向かう不吉な夢を見た話をする 第8巻 第9段

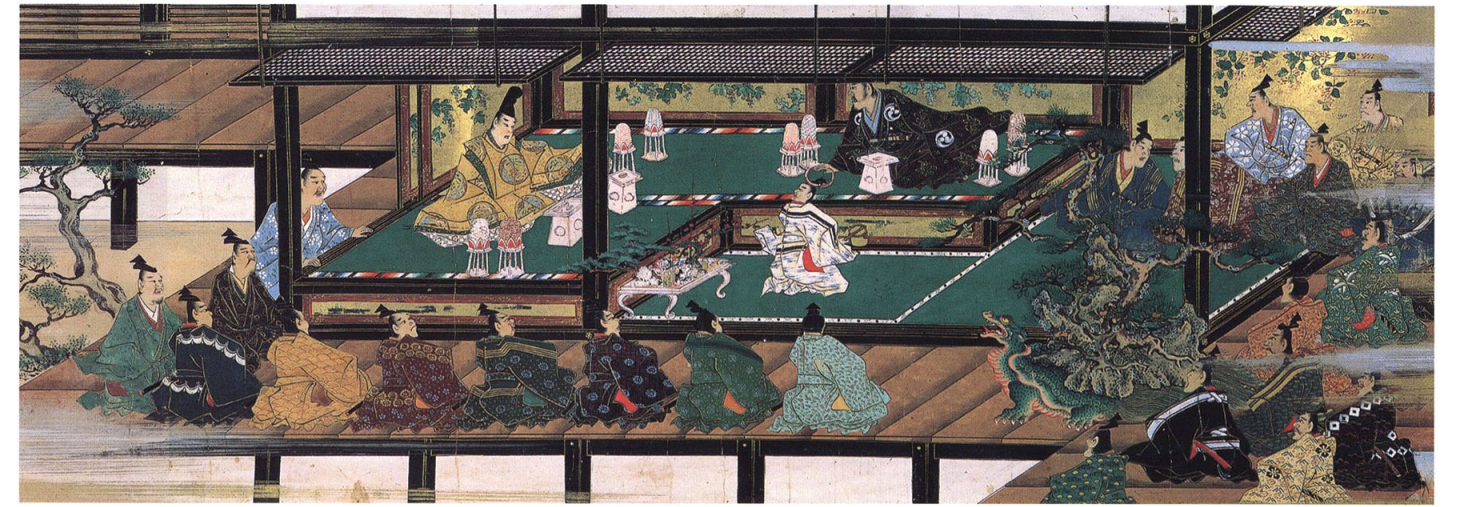


小栗は夢違の呪文を唱える 第8巻 第10段





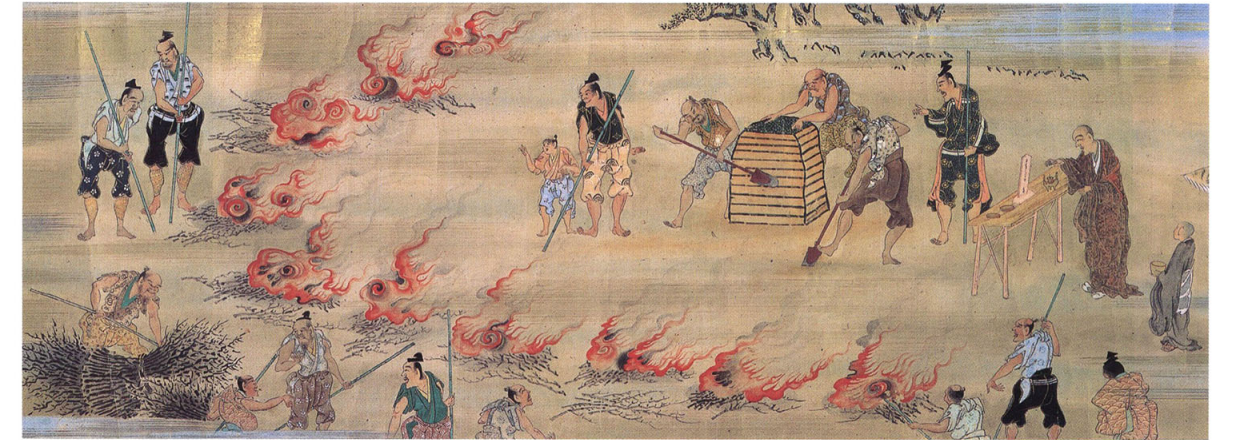
小栗らは毒酒によって次々に倒れ死ぬ 第8巻 第17段



小栗は横山の飲酒のすすめに、来宮信仰の日なのでと断る 第8巻 第12段



照手は相模川のおりからが淵に沈められることとなる 第9巻 第2段



横山は小栗を土葬に、家来を火葬にする 第8巻 第20段



もとをりこまつ



難を逃れた照手は商人に売られていく—よしはら、さまたけ、りんかうし、宮の腰 第10巻 第1~2段



毒殺された小栗と家来は閻魔大王のもとへ送られる 第10巻 第19段



大王は小栗を娑婆に戻すため、杖で虚空を打つ 第11巻 第2段



大王は、娑婆へ戻す小栗の胸札に藤沢の上人へのことづてを書く 第11巻 第1段



相模原では、横山家中の侍も照手の供養にと車を引いた 第11巻 第7段



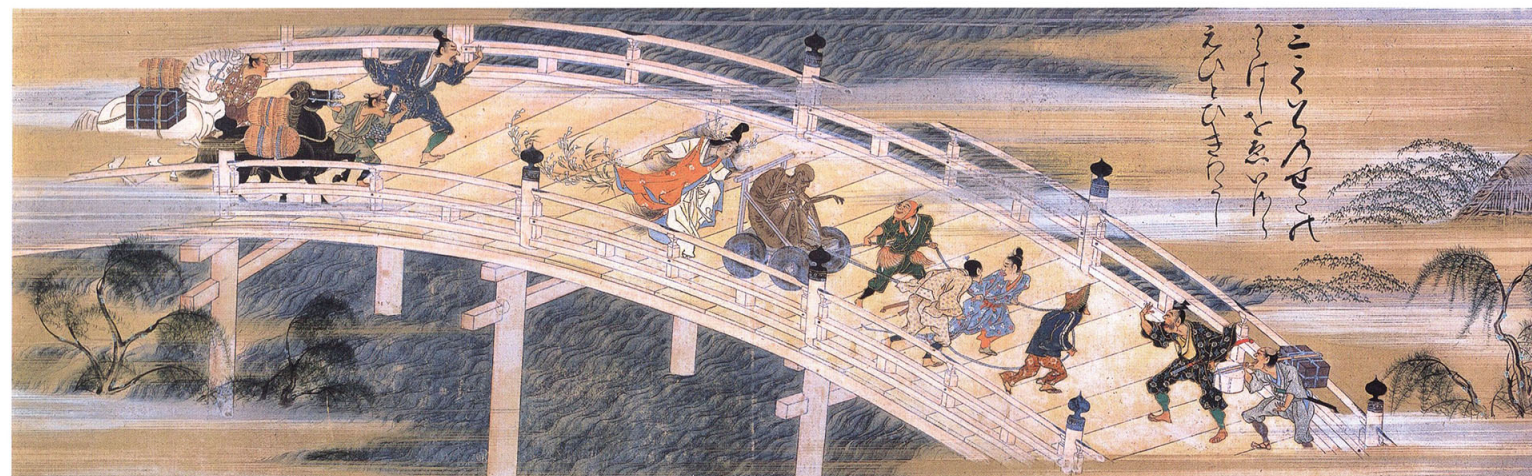
藤沢の上人は上野が原で餓鬼姿の小栗を見つける 第11巻 第4段



富士の裾野



餓鬼阿弥の道中一吉原 第11巻 第18～19段



餓鬼阿弥と照手の道中一瀬田の唐橋 第13巻 第5段



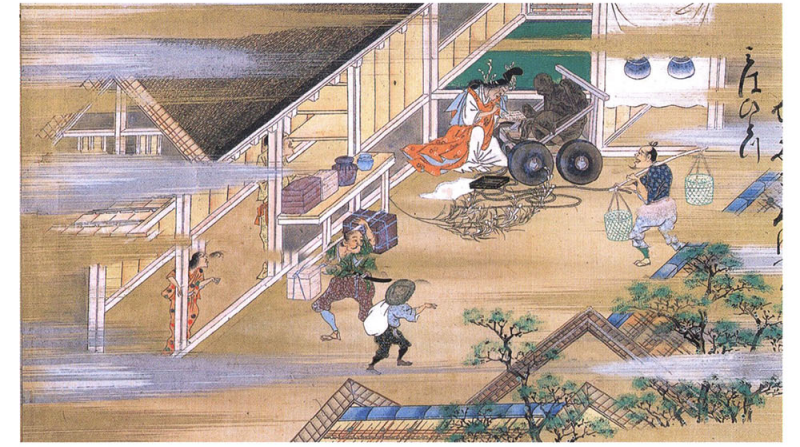
餓鬼阿弥は美濃国青墓の宿で照手に見つけれ、照手は小栗の供養に車を引きたいと希望する 第12巻 第36段



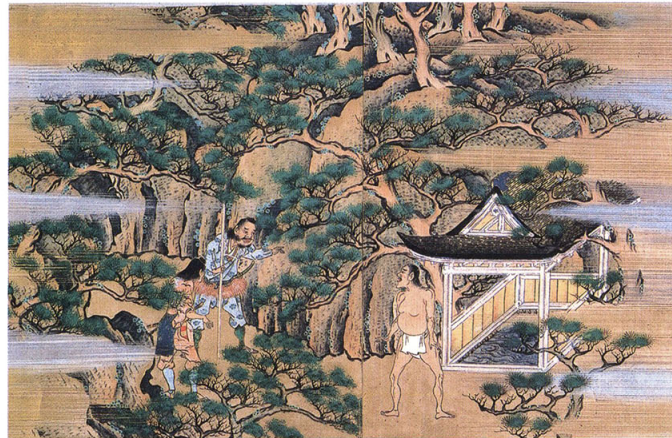
東寺、さんしや、四つの塚



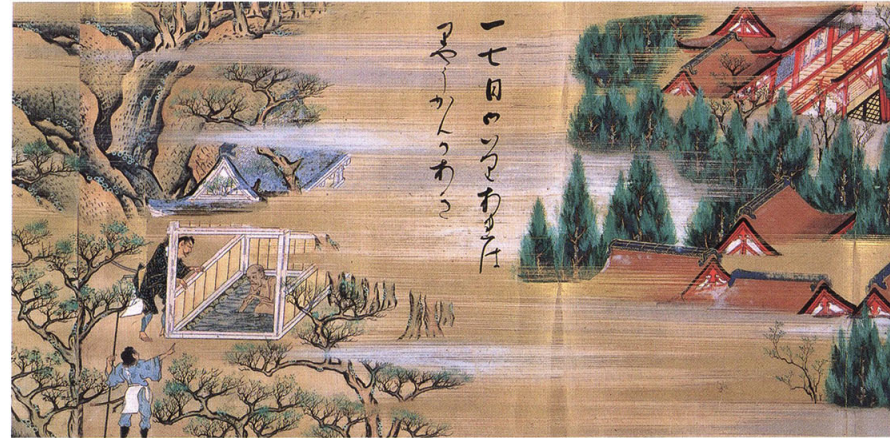
餓鬼阿弥の道中一京 第13巻 第15~16段



照手は、本復の後は常陸小萩を訪ねるよう、胸札に書き添える 第13巻 第10段



餓鬼阿弥は四十九日目にもとの小栗の姿に戻った 第13巻 第37段



七日目には両眼が開いた



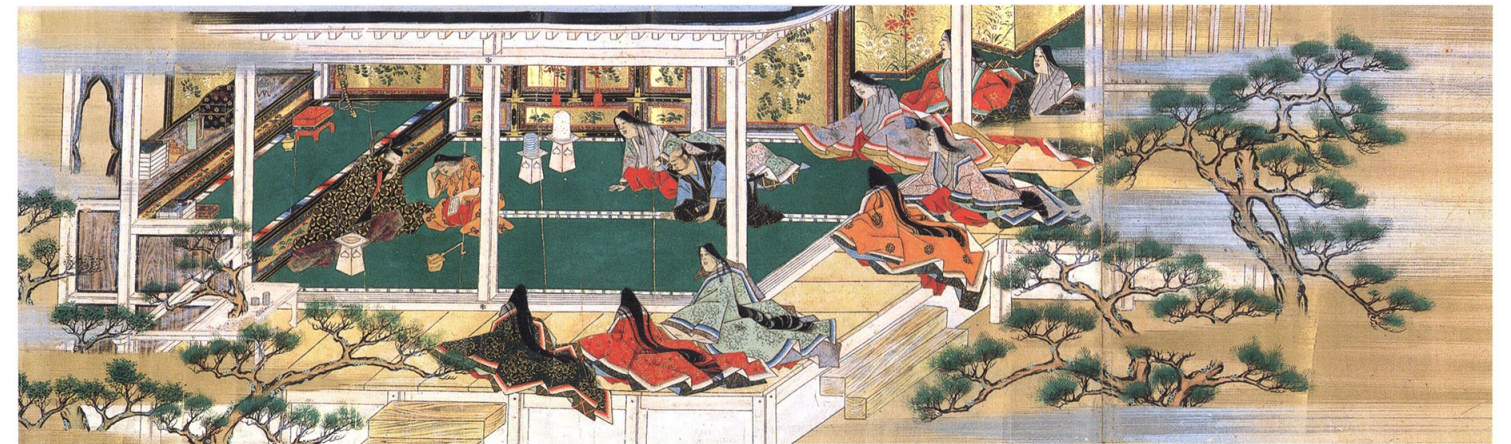
第13巻 第34~35段
餓鬼阿弥は四百四十四日目に熊野本宮湯の峯に入る



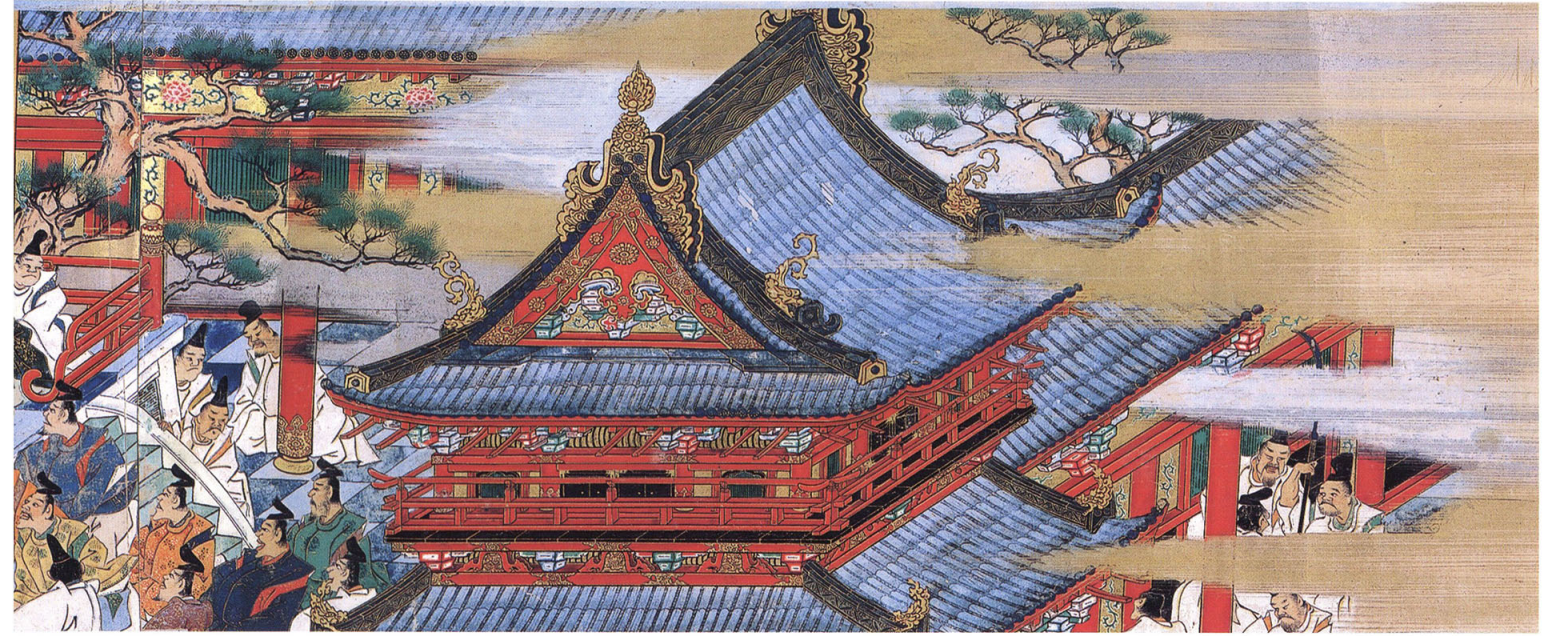
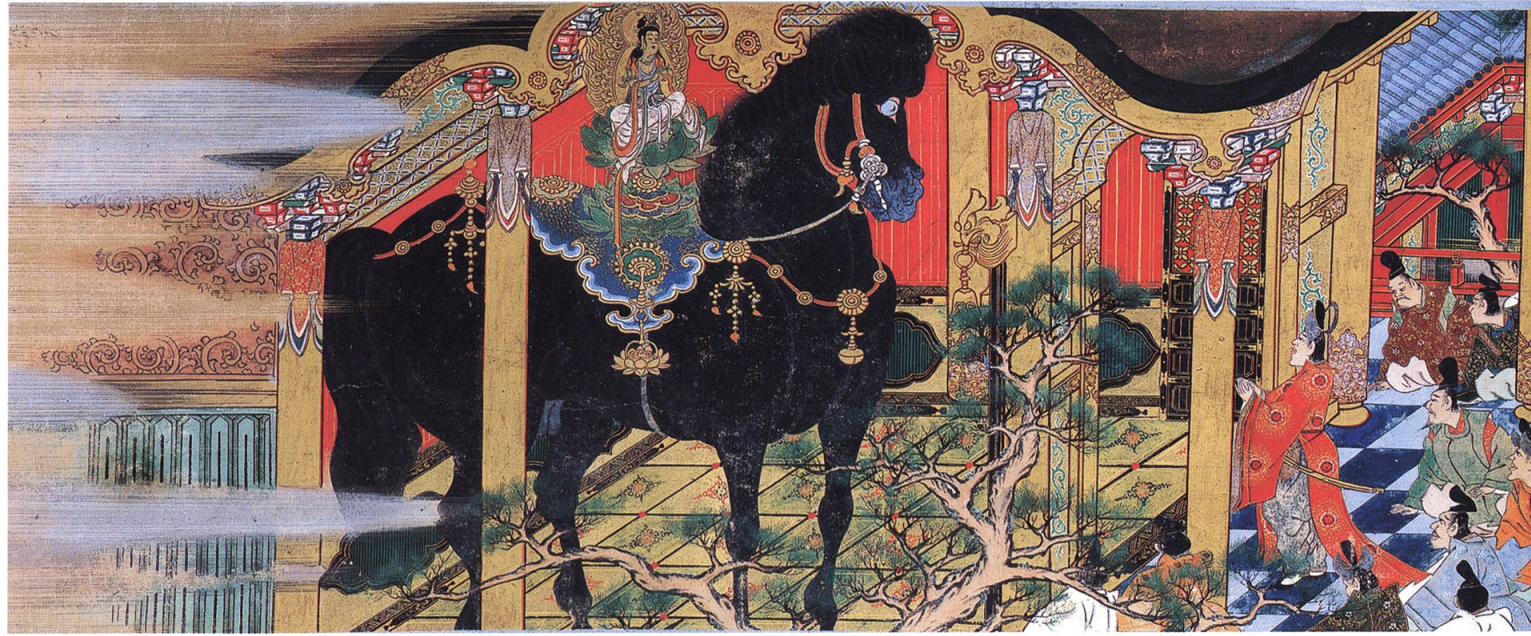
餓鬼阿弥は大峯山中を山伏に背負われて進む 第13巻 第33段



小栗は、照手が父への逆罪を嘆いたので、照手に免じて横山を許す 第15巻 第6段



小栗と照手は互いと分かって、逢えたうれしさのあまりに号泣する 第14巻 第20段



小栗は横山が送ってきた黄金で御堂と寺を建て、鬼鹿毛を馬頭観音として祀る 第15巻 第11段



小栗は常陸国で富み栄え、八十三歳で大往生する 第15巻 第16段



小栗は往生して、あらゆる神仏に供養される 第15巻 第17段



照手も近くに縁結びの神として祀られる 第15巻 第19段



小栗は美濃国の垂井のおなこと社に神として祀られる 第15巻 第18段

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

絵巻を愉しむ ―《をくり》絵巻を中心に

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 69

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年七月四日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanjōmaru Shozokan